



## 発刊あいさつ

財団法人 沖縄県漁業振興基金

理事長 古謝得善

今般、沖縄県水産試験場のご協力を仰ぎ「沖縄県の漁具・漁法」を発刊することができました。本書には、先人たちが工夫し育ててきた漁具等現在営まれている漁具・漁法を掲載しており、これからの漁業経営の改善及び漁業技術の改良の礎えになるものと確信いたします。

最近の本県漁業をとりまく情勢は、水産資源の減少、沿岸海域の環境悪化、国際的海洋秩序の定着、魚価の低迷及び漁業用諸資材の高値維持等きわめて厳しい状況のなかで、国営及び県営栽培漁業センターの開所等の諸施策が講じられ栽培漁業が展開されつゝあります。そのような情勢に対応し漁業の振興を図るには関係機関、業界及び漁業者が一体となって取り組まなければならないと痛感しております。

沖縄県漁業振興基金は、本県漁業の振興に寄与すべく諸事業を実施し「生産性が高く、豊かで、活力ある、安定した漁業」を目標としておりますが、それを担う漁業を営む皆様により一層のご活躍が期待されております。漁業生産技術の高揚及び漁労機器の導入等により「資源の枯渇」が危惧されている昨今「つくり、育て、獲る」漁業への変遷が余儀なくされておりますが、「適当な時期に、適当な場所で、適当な漁業」を営み、良質な動物性タンパク質供給産業として地域経済に貢献しつゝ、豊かな漁家経営にまい進されることを切望いたします。

本書を編集するにあたり、資料収集にご協力を賜った漁業者及び漁業協同組合、その資料をまとめて下さった沖縄県水産試験場漁業室の久貝一成室長ほか研究員諸兄に衷心より感謝申し上げます、発刊のあいさつといたします。

昭和61年3月



## 発刊にあたって

沖縄県水産試験場

場長 崎山 憲 一

このたび「沖縄県の漁具・漁法」が上梓されることとなり、当水産試験場で長い年月をかけて蒐集して来た県内の漁具・漁法に関する情報が整理され公開される運びとなったことは喜ばしいかぎりである。

これまで久貝一成室長を中心とする漁業室、凶南丸、くろしおのスタッフが業務の合間をみて漁業者及び漁協の協力を得ながら情報を集めてきた。中にはすでに退職したものもいる。多くの人達の労苦の積み重ねがようやく日の目を見ることとなったのである。発刊にあたり沖縄県漁業振興基金の好意に深く感謝する次第である。

漁具・漁法というものは元来各地の漁業者が自分達の漁場に適したものを考案し、伝統的に使用して来たものである。そしてそれらが後継者達によって改良を加えられて発達して来たものである。したがって漁村ごとに使用される漁具・漁法もそれぞれ独自性を持っており、そのために非常に保守的な側面を持っている。例えば釣り漁業者はなかなか網漁業には馴染めない。逆もまたしかりであるというような例が随所に見受けられる。

近年の漁業は経営面からも、資源の面からも数々の制約を受けるようになってきた。これからの漁業は資源の管理を考慮しながら有限の資源を効率よく利用しなければならなくなっている。最近では漁業者レベルでの情報の交換も大に行われるようになり、先進地の漁具・漁法の導入も活発に行われるようになってきた。本書が多くの漁業者によってそれぞれの地域、漁場に適合する方向で上手に利用され、漁業者の経営安定ひいては本県の沿岸漁業の振興に役立つことを切に希望する。

昭和61年3月



## 発刊に寄せて

沖縄県漁業協同組合連合会

会長理事 糸満三郎

四面海に囲まれ、日本唯一の亜熱帯地域として、自然的にも地理的にも恵まれた条件下にある沖縄の水産業は、又歴史的にも沖縄の基幹産業の一つとして時代と共に引き継がれて来た。

漁具も漁法も業態により地域によって多少異ってはいるが、われわれの先代達が長い年月をかけ尊い体験を通して、知恵と工夫と努力によってあみ出した優れた漁具・漁法である。

今日ではそれらの漁具、漁法も時代の変遷と共に更にそれなりに改良され、又、新しい漁具、漁法が開発され、沖縄の水産業振興の要となっている。

今や水産業界は 200 海里時代の定着化に伴い、国際的な漁場の規制、燃油、資材等の高値推移、生産の伸び悩み魚価の低迷等極めて厳しい情勢下であり、漁業経営は極めて苦境に追い込まれている。

このような厳しい現実を乗り切る為には行政の強力な水産業振興策の推進は勿論であります但同时に漁業にたづさわる者が生産に対する創意工夫とたゆまぬ努力が必要である。

したがって、そこに生産の手段である漁具・漁法の重要性が強調されるものである。

しかも世界の海洋分割時代の進展に伴い、狭められつゝある漁場問題は 200 海里水域の再開発によって生産をカバーする以外にないとの観点に立つ時、いよいよ漁具、漁法の創意工夫と開発は今後の水産業振興のキーポイントとなる。

このときにあたり水産試験場と漁業振興基金が相提携してわれわれの先代達が工夫し、育んで来た漁具・漁法をつぶさに取り上げ、大事な記録として発刊されることはまことに時宜を得た企画であり、参画された皆さんに深く敬意を表するものであります。

本書は今後の厳しい漁業環境のもと、漁業経営の安定化を促進し、漁家の営漁計画策定の大きな力になるものと確信し、漁業者の皆さんが一つの道しるべとして活用されることをお勧め致します。

昭和 61 年 3 月

## は し が き

沖縄県の漁具漁法についてとりまとめる話しが水産試験場にあってから久しい。その間単発的な調査に終始したこともあって今日に至った。内容はともかくまさに難産の書と云える。従って時間的経過は当初調査した漁業が定着することなく廃業したもの、改良されたものなどせつかく調査したものがこの書に載せられなかったものもある。その代表的なのはサンゴ網であり、本部のタカサゴ追込網、金武湾、中城湾を主漁場としていっとき行われた吾智網等である。これからみると漁業も時代や状況変化で栄枯盛衰していると云える。

本書が出て以後どのように漁業が変わって行くか知るよしもないがこの書を通じて沖縄に現在どんな漁業があり、どういう漁具で操業されているかを認識していただければ幸いである。

漁具・漁法は日々これ改良されて行くので本書を基本に今後も関係者の御指導、御協力を得て更に新しいものを集録したい。

編集には、水産試験場の久貝一成、金城宏、漁業振興基金の知念良廣が直接係わった。

本書作成には多くの方が関与し、支援していただいた。特に漁業者の方々には多大な御協力をいただきました。ここにこの紙面を借りて感謝申し上げます。

昭和 61 年 3 月

沖縄県水産試験場

漁業室 久 貝 一 成